



下松市に待望の “市民活動拠点施設”が完成！

平成24年に完成した、下松市市民交流拠点施設「ほしらんどくだまつ」には、図書館を始め多目的ホール・会議室・カフェ、そして市民企画運営ボランティアと、行政の協働による歴史民俗資料展示コーナー、「くだまつふるさと広場」があります。

広場では、『ふるさとの伝承行事と生活文化』、『下松に現存する70年前の防空遺構』など、現在21名のボランティアが企画～展示までの運営を行い、市民から好評を得ています。

また、待望の「市民活動室」が設置され、活動の拠点があるという安心感とともに、今後の市民活動の広がりが予感されます。

下松市 前川 育



市立中央図書館を直営に！ 原動力になった「友の会」

本を借りたり、自習をしたり、新聞を読んだり、猛暑や寒波をしのぐ所——図書館のイメージの多くはこんな感じではないでしょうか？

そんな中、“図書館からまちづくりを！”と講演会や学習会・交流会の開催、市内外の図書館見学、会報の発行、図書館や市へお願い・提言などの活動をしているのが「下関図書館友の会」。

会の地道な活動は、ここ5年ほど指定管理だった市立中央図書館を、新年度より“市の直営”に移行・もどす原動力となりました。

平成20年設立、8団体、80個人で構成、協働しながら地域活性化に貢献している。

下関市 乗兼 佑司

キラリ
輝く

地域あんでな

県民活動推進委員が
地域情報を紹介します！

Column



パートナー

レビューコラム

文 企画運営委員 原田 茂樹

普段（会話の中で相手方の家族に話題が及んだ時、何気なく「奥さん」、あるいは「ご主人」「旦那さん」という呼び名を使っています。使った慣れた呼び名ですが、どこか古めいた響きが残ります。「奥」というのは家の中に女性を縛り付けていた時代の名残ではないでしょうか。「主人」は家長制度がそのままと言えないでしょうか。

ことに、仕事の上下関係では慎重になります。上司に向かって「部長の妻」、あるいは「課長の夫」という言い方は不自然です。そこで奥様や旦那様というような言

私、他人にパートナーの話をする時は「主人」、親しい友達には「旦那さん」、両親の前では「○○さん」と表現します。ちなみに、お互いのことは「ちゃん付け」で呼び合います。

そして、対外的に「主人」と表現しても、私と主人は「主」と「従」の関係ではありません。お互い仕事もして家計も二人で賄っていますし、家事も二人で協力して進めています。

「主人」「家内」という言い方を「男尊女卑だ」「女性がへりくだつているようで嫌だ」と考える方もいらっしゃるようですが、私は全く気になりません。確かに語源はそうかもしれませんが。しかし今の時代、この言葉自体がパートナーを表す、単なる「単語」であって、語源を意識して使っている人は、あまりいないのではないかな、と思うのです。

要は、TPOに合わせて、お互いと周りが違和感なく、気分を害さない呼び方が大切なのだと思います。

い方を用いてしまうことが少なくありません。礼儀に従う気持ちですが、そうした言葉を選んでしまいがちです。

同僚や部下に向かっては「妻君」（さいくん）や「夫君」（ふくん）という言い回しも使えそうですが、耳で聞くのと文字を読むのでは微妙に異なります。

その点、このコラムのテーマ“パートナー”は男女どちらにも使えそうです。一般的には耳慣れない感がありませんが、ジェンダーバイアスから解放された呼び名を広めていきたいものです。

文 企画運営委員 藤本 博美